

## 生活科におけるキャリア教育の構築Ⅲ

内藤 博愛 朝倉 淳 神山 貴弥 須本 良夫  
樽谷 秀幸

### 1 生活科とキャリア教育

#### (1) キャリア教育とは

三村隆男は「はじめる小学校キャリア教育」(実業之日本社2004年)において、キャリア教育は「特定の内容をもった、特定の時間、特定の教科・領域を使った教育活動を指すのではない」という前提を示している。つまり、キャリア教育は全教育活動を通して行うもので、一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、教科・領域をこえて、学校教育を改革していく理念や方向性を示すものである。

では、具体的にどのような能力を全教育活動で育もうとしているのか。三村は以下の4つの能力を例示している。

- 人間関係形成能力 ○ 情報活用能力
- 将来設計能力 ○ 意思決定能力

また、「勤労観」「職業観」に即して、小学校段階での発達課題を考えた場合、

- 自己及び他者への積極的関心の形成・発展
- 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上
- 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得
- 勤労に重んじ、目標に向かって努力する態度の育成

を挙げている。もう、お気づきかもしれないが、これらの内容は、これまでも大切にされてきたし、これからも大切にしていってほしいものである。

#### (2) 全教科・領域とすることで教科の役割が曖昧にならないか

三村はキャリア教育は「教科・領域を超え」て行うと明言している。しかし果たして、そのような構えで上の4つの「職業観」「勤労観」を培う発達課題を達成できるかどうか、甚だ疑問である。もちろん全教育活動で行うべきことであるが、それだけに留まらずに、キャリア教育の「守備範囲」を具体的にしたい方が望ましい「職業観」「勤労観」を培う上で有効ではないのか、

という立場を私はとる。なぜなら、三村自身、例えば、低学年におけるキャリア教育という視点から育成させたい能力、態度として「身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心を持つ」「家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる」等を挙げているのだ。まさしく生活科の学習内容ではないか。生活科学習指導において、この能力の育成は十分可能である。

「職業観」「勤労観」を一つの視点として生活科の年間指導計画を作成できないだろうか、と考え本共同研究テーマを設定した。

#### (3) 前年度までの研究で得られた示唆

この2年間の共同研究において(生活科におけるキャリア教育の構築Ⅰ・Ⅱ)朝倉淳は次のように指摘している。以下、長くなるが抜粋・引用する。

「生活科では、仕事そのものが学習内容として位置付けられているわけではない。生活科における仕事は、児童がかかわる身近な人々の営みとして存在する。仕事は、児童と人々とを結びつける営みの一つなのである。以下は、生活科の内容(1998年版「小学校学習指導要領」)に示された、「仕事」と関係する「人々」である。生活科には、自分とのかかわりを通して、いろいろな仕事に出会う機会があると言えよう。生活科の内容をキャリア教育の学習プログラムにおいて小学校低学年に期待する具体的な能力・態度とあわせてみるならば、その育成に直接関係する学習の機会が、生活科には存在することが分かる。」とし、次のように生活科の内容と「仕事」との関係を整理している。

- (1) 学校と生活・・・先生など学校の生活を支えている人々。通学路の安全を守っている人々
- (2) 家庭と生活・・・家庭生活を支えている家族
- (3) 地域と生活・・・近隣の人、店の人など地域の人々
- (4) 公共物や公共施設の利用・・・公共物や公共施設を支えている人々
- (8) 自分の成長・・・生活や成長を支えてくれた多

くの人々

この示唆を踏まえ今年度、更に研究を進めた。

## 2 本年度実践事例「小さな先生登場」

授業者 広島大学附属東雲小学校 須本 良夫

### (1) リアルなごっこ活動

子ども用玩具やテーマパークなど子どもたちを取り巻く環境は、一昔前のそれらと比べると比較にならないほどのリアルさとなっている。例えば、ママごと遊びの道具と思われる台所用機器を模倣した玩具の中には、本物の家電製品と同等の機能がコンパクトに詰まったものがある。テーマパークにしても遊びを通して様々なことがわかる工夫がしてあり、実際の町工場がテーマパーク内に併設されていたり、実際に放水をしながら消火活動の体験ができたりするというリアルさが随所になされている。

こうした本物志向が入り込んできた背景には、子どもを取り巻く環境の変化が様々な要因として考えられる。

○少子高齢化⇒子どものための玩具に、お金をかけることができる。

○キャリア意識の向上⇒様々な職業体験の場、意識、方法などの拡大。

○玩具開発の技術進歩⇒素材の変化、ITの進歩による小型化。

○町工場の零細化⇒物づくり日本といいつつも、中小工場は都市より減少。

社会情勢の移り変わりから見ると、ここに挙げた以外にも理由はある。また、これらの理由が内在し複雑絡み合っていることも考えられる。

また、京都にあった「わたしの仕事館」のコンセプトは『しごと館は、若い人たちが早い時期から職業に親しみ、自らの職業生活を設計し、将来にわたって充実した職業生活を過ごすことができるよう、様々な職業に関する体験の機会や情報を提供するとともに、必要な相談・援助等を行います。』ということであった。社会の中でニートやフリーターという階層が意識され始めたときから、他の要因とも絡まりあい職業体験の必要性をとく社会環境は出来上がり、今日のようなリアルなごっこ活動が世の中に充満し始めた。

こうした社会の要請を受けたリアルなごっこ活動は学校教育の中において、どのような要求として位置づけ、受け止めればよいのだろうか。

本研究では、これまで2年間の取り組みの成果として、小学校低学年の段階でキャリア教育は生活科でなうことの重要性を明らかにしてきた。そこで、3年

次に当たる今回、生活科の中でこれまでの活動を、よりリアルな体験活動を仕組むことによって、子どもたちはどのような意識の変容をしていくかを探ることを実践に取り入れた。

### (2) ごっこ(遊び)活動の分類

ごっこ活動は、乳幼児期から低学年の段階あたりでは盛んに行われるいわゆる一種の遊びの形態である。現実世界で展開されていることを真似るという要素が、自分世界と結びつけて認識の拡大を図っているところがある。そのため、これまでも発達段階を考慮し、ごっこあそびを重要視して学習の中に位置づけ多く行われてきた。

真似るという点についていうと、「見立てる」と「成りきる」ということに分類される。

#### ①ごっこ活動における「見立て」

見立てるとは、例えばチャンバラで遊ぶ子どもたちの木である。ただの木を遊びの中では、本物の刀であるというルールに基づいて刀へと変化させ、遊び事態を本物とする。

授業場面などでは、学校探検などで見てきた給食室の大きな杓文字の動きを報告する際に、しゃもじがなくても、教室にある大きなものさしを杓文字として表現するなどといったことが行われる。これらは共通の学習をしている中で、自然に行われる暗黙のルールである見立てが発生しているのである。

#### ②ごっこ活動における「成りきり」

「成りきり」というのは、子どもの遊びの中には多く見られる。具体的事例を示せば、ママゴトなどでなにか与えられた配役になることである。子どもたちはママゴト遊びでは、様々な配役となって役柄を楽しみ、多くの場合は遊びが始まった瞬間に役に成りきり、あらかじめのせりふなどはなく、すべてがその場限りの即興で進行する。遊びの発展とともに、集団の中で場面設定などは子ども同士で確認される。即興劇である以上、ごっこ活動では未経験のものが会話の中に出てくることはほとんどの場合はないと考えられる。見たり、聞いたり、実体験をした中からしか受け答えの対応は生まれない。

#### ③学校単元の中でのリアルな先生ごっこ

体験の少ない子どもたちにとっての、実際のリアルな体験を通して知らないものを認識していくこと、さらにそのリアルな体験を低学年の発達段階として、ごっこ遊びを通して行うことは、認識の広がりや深まりを促していく上において有効となると考えた。

また、単元の中においてリアルさの追及のために、どのようなごっこ活動を仕掛けていくかが単元構成の

重要な点となる。そこで、本単元においては、先生になりきる活動の時間を設定した。先生を見る出なく、先生になると、学校は一年生にとってどのように認識されていくのだろうか。

この考えにもとづき、これまで見る（発見）ことを重視してきた学校探検を、よりリアルな体験（先生になってみよう）という活動へ転換することによって、子どもたちは学校にいる人の立場にたち、学校を主体的に見つめていくことにつながると考えた。

### (3) 単元について

入学して約3ヶ月の1年生の子どもたちにとっての学校とは、知らなかったものがたくさんあり興味をそそる不思議な場所であるとともに、多くの時間を費やす生活の場であり、新しい友達とともに活動や出会いの場である。

一年生の発達段階として、学校に通っているという実感はあるが、学校というものを新たな視点で見つめ直し、自ら一つ一つの場所の役割を考えてみようということは行わないだろう。それは、普段の生活の体験をもとに学校というものを一人一人が映し出しているからである。そして、その共通体験から得られている

一人一人が感じている学校のイメージは、大きくずれてはいないからだろう。

しかし、学校を個々に分割すれば各教室（部屋）の意味や各教諭の仕事、さらには小さな道具一つにまで意味や機能などがある。こうしたものに改めて問いをもち、検証のために表現をしようとすれば、見つめ直さなければわからなかった学校像が見えてくるはずである。

### (4) 学習のねらい

- ① 自分のめあてをもち、進んで探検をしようとしている。
- ② 探検の中で発見したことを自分なりに、絵や文、言葉、身体で表現し友達へ楽しく伝えることができる。
- ③ 学校の機能・役割を軸に自分とのかかわりに気付くことができる。

### (5) 単元の計画と実際の様子（図1参照）

学習指導要領では、すべての教科で言語活動の重視がいられている。それは生活科においても同様である。

気付きに関しても、「気付きの質を高める」という

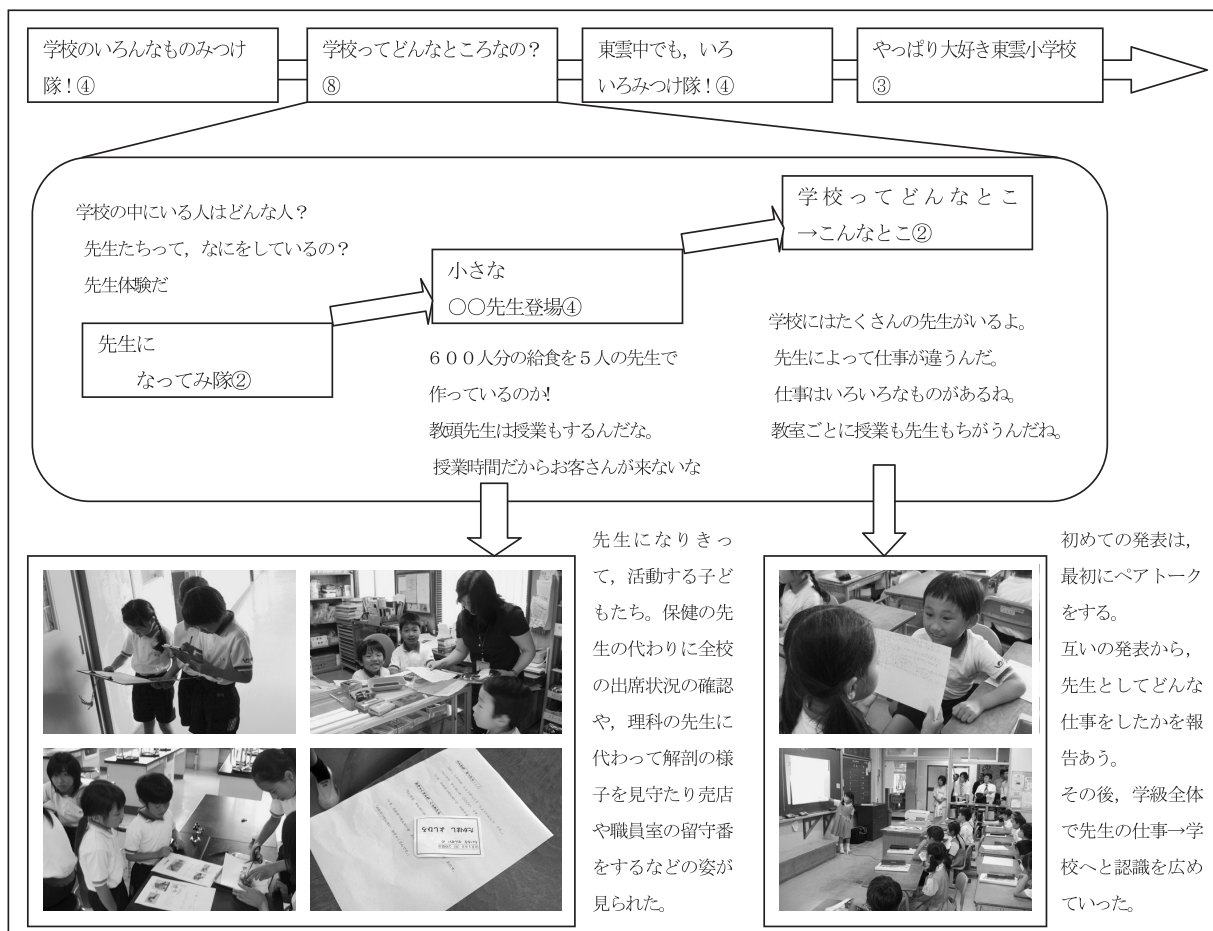


図1 単元の流れと子どもの姿 学校探検 —小さな先生登場—



言葉が用いられ、活動の中で素朴な「気付き」から「認識」へ、いかに質的向上を促していくかが今後も重要なものと成っている。そのためには、生活科で一つの方法原理とされてきた活動の繰り返しなどの単元の構成も、これまで以上に工夫や仕掛けが求められる。

活動の構成としては次の3つである。

- 1：活動1⇒交流
- 2：活動1⇒交流→活動1'⇒交流  
(同じ活動を繰り返すことで質を高める)
- 3：活動1⇒交流→活動2⇒交流  
(異なる活動を仕組み、質を高め目標に迫る)

- 1の場合：活動ただけで終わりがちとなる。後に気付きの質を高めるには何らかの交流活動が必要になる。
- 2の場合：同じ活動の繰り返しにより、時間的な違いや場所などの違いから変化、違いを比較でき気付きが深められる。
- 3の場合：ある認識に迫るために、異なる活動を構成し、2つの活動から共通に抽出できることは何かなどを類推したり、抽出したりすることで気付きの質を高めることができる。

本実践では、一回目の学校探検を2年生と行った。この段階では2年生について学校に何があるかを教えてもらうというものであった。その後、よりミクロに先生になりきることで視点を変えて学校を見直すということを行った。

そして、小学校とはどんなものかを認識した上で、中学校でも同じようなことがいえるのかという更なる確認を行った。つまり、上記の分類では2と3の併用となっていたこととなっている。

### (6) 子どもたちの反応から

今回の実践では、子どもたちが先生になってみて体験した仕事を交流した後、先生という職業をそれぞれがどのようなイメージをもったかということを表示させるという試みを行った。

表1 子どもたちの抱いた先生のイメージ (40人)

分類	人数(人)	分類	人数(人)
家族	12	植物	3
自分のヒーロー	9	顔の表情	1
動物	6	物	1
機器	7	行事	1

子どもたちが先生にもったイメージは、家族が多くを占めた。その中でも、母親をイメージするところが多く理由としてあげられていた。

- やさしそうで、いつも一杯仕事をしているから。
- いそがしそうだから

これらは、子どもたちの日常生活の関わりの多いところへ引き寄せて考えたということが伺える。

また、ヒーロー、動物、機器なども先生の仕事としての特徴が理由(がんばっている、やさしそう、にこにこしている、おもしろいなど)というよりも、自分の知っているものと関連付けをしようとしていると言ったことが見て取れた。低学年の語彙の数ということも、一つの要因である。もう一つの要因として考えられるのは、「先生」という大きな括りのままで子どもたちにイメージを訪ねたためかもしれない。先生の仕事を詳細に分け、各自が体験した各先生方の仕事ということに着目させたなら、そのイメージもより多様なものとして現れたに違いない。例えば、保健室の先生は看護師さんとか、給食室の先生の仕事は食堂の人とかになれば、それは、学校というものの構造が、より話し合いの中で深まりとなったのではないかと感じる。

子どもが体験したことを、どの段階でどのように気付きを出し切らせていくかということ、今後も課題となることである。新学習指導要領においても「見つける」「比べる」「たとえる」ことが具体的に加えられた。これまで以上に気付きを深める手だてとして、一人一人の言葉の背景にある思考やその後の変容を追っていく必要がある。(須本 良夫)

## 3 共同研究者の考察

### (1) 須本実践の特色と展望

#### ① 須本実践の特色

2008年3月に告示された「小学校学習指導要領」では、生活科において「人々」が強調されている。内容には、学校生活を支えている人々、通学路の安全を守っている人々、家族、地域で生活したり働いたりしている人々、公共物や公共施設を支えている人々、など身近で多様な人々が示されている。キャリア教育の観点から、いろいろな人々との出会いが計画されることは望ましい。しかし今日では、分業化・専門化、機械化やIT化などにより人々の働く姿は少し見難くなっている。小学校低学年の児童にとって最も身近で観察しやすくいくらかでも実際にやってみることができる仕事は教職員の仕事であろう。

須本実践の特色を一言で表すならば、「なることによって学ぶ」(ブライアン・ウェイ、岡田陽・高橋美智訳『ドラマによる表現教育』玉川大学出版部、1977年、参照)である。幼児や小学校低学年の児童は、いろいろな人々とかかわりながらその人々を観察し、ごっこ遊びのように役割取得し表現することで理解を

深めていく。須本実践では、児童がある教職員に役割取得し、その人になって実際にやってみることで学校生活を支えている人々やその仕事についての理解を深めることがねらわれている。もちろん、その体験はごく一部であり断片に過ぎないが、「単なる観察」を超える学習の可能性を大きく広げるものである。実際に子どもたちの学習の経過や結果をみるならば、仕事を体験したからこそその気付きが生まれている。生活科におけるキャリア教育の一つのアプローチとしての価値を有する。

## ②須本実践の展望

### ア 話し合いの構成

学校内には意外と様々な仕事が存在する。学級担任教員、専科教員、校長、教頭、調理員、栄養士、養護教諭、学校司書、事務職員、など、小さな社会を形成している。子どもが一人の教職員に付き、役割取得して仕事を体験したとしてもそれは学校のごく一部でしかない。したがって、児童一人一人の体験や気付きをどのように分かち合い共有化していくかが重要になる。このような学習において、体験後の話し合いをどのように構成するかは今後の研究課題の一つであろう。

### イ 年間計画・単元構成への位置付け

児童の実態を考えるならば、スタートカリキュラムの導入が推奨されている年度初めの時期には、このような実践は困難であろう。第1・2学年のいつの時期が適当であるのか、どのような年間計画や単元構成の中でこの活動を組み込めばよいか、などが検討される必要がある。これについても今後の研究課題の一つとなる。(朝倉 淳)

## (2) 社会・発達心理学的見地からの考察

今回の須本実践では、リアルなごっこ活動として、子どもたちにとって身近な職業人である先生(学校の教職員)の仕事を体験させた。自分自身のその体験や仲間の体験から、自分たちが日常的に生活している学校、つまりその社会の仕組みについて気付かせ、さらに自分とのかかわりについても気付かせた。これがもし、見学だけの学校探検で終わっていたならば、十分な“気付き”にはつながらなかったことは容易に想像できる。

小学校学習指導要領(文部科学省、1998)における生活科の目標には、「・・・集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動できるようにする。」ことが含まれるが、須本実践での“気付き”は、まさに集団や社会の一員としての自覚を高めるものに他ならない。一方、キャリア教育において

も、社会的自立・職業的自立のためには、「児童生徒が社会の一員としての自己存在を理解」することが大切である(文部科学省、2006)とされており、須本実践が、キャリア教育にも立脚した取り組みになっていることは明らかである。

近年の社会・発達心理学の研究から、自分の性別や家族、あるいは年代についての社会的アイデンティティ(集団の一員としての自己定義)が遅くとも5才くらいまでに、さらに自分が所属する身近な集団に対してのそれは7才くらいまでに確立されることが明らかにされている(例えば、Bennett & Sani, 2008)。こうした研究の成果を踏まえるならば、小学校1年生の段階で、自分を取り巻く社会や社会との関係に気付かせる活動を導入することが、ちょうど好機を捕らえた取り組みになっていることがわかる。また、見方を変えれば、須本実践は、この時期の子どもの社会的アイデンティティの確立に寄与する取り組みであるとも言えよう。

個人的アイデンティティ(独自の存在としての自己定義)を確立することももちろん大切なことであり、例えば、それは青年期前期の発達課題にもなっている。しかし、小学校1年生段階は、ちょうど自己中心性からの離脱の時期、つまり自分の視点や経験を中心にして物事を捉えるのではなく、他人の視点に立ったり、自他の経験を相対化したりができるようにならねばならない時期である。それゆえに、社会的アイデンティティの確立に寄与する須本実践は、この時期の子どもの社会的発達を促すという点でも有意義な取り組みと言えるであろう。(神山 貴弥)

## (3) キャリア教育としての「学校探検」

本稿では、全国の多くの学校で一般的によく行われている従来の「学校探検」と、須本実践とを比較しながら、その相違点や意義について考察を試みたい。

須本実践の一番大きな特色は、児童自身が学校の先生となって、実際に仕事を体験してみる点にある。例えば、従来の学校探検では、給食室にある機械や道具を観察したり、栄養士や調理員の方にインタビューをしたりして、給食室の役割や仕事の意味について考えるという形で学習が進められる場合が多かった。可能であれば、実際にその道具を触ってみたり使ってみたりすることもあったであろうが、児童はあくまでも客観的な観察者としてそこにいる。

対して、須本実践では、児童の立場は主体的なものであり、ごっこ活動とは言いながらも、行っていることは本物である。もちろん、安全面・衛生面などから、実行できないことも少なくないが、児童ができること

は極力児童の手で行うようにさせているし、また、基本的に児童のいる時間と場はリアルなものである。

では、そのようなリアルなごっこ活動としての「学校探検」には、どのような意義があるのであろうか。

1つ目は、「学校探検」に対するアプローチの方法が、多くの機能をもつ教育の場であるハードとしての「学校」ではなく、多くの役割をもつ教育者の集まりであるソフトとしての「学校」の面から行われている点である。そのため、児童は働く人間の姿から学校を捉えることができ、身近な1つの社会に目を向けることとなるであろう。

2つ目は、児童が五感を働かせてものごとをとらえることができるという点である。話を聞いただけではピンと来ないようなことでも、自分で実際に行うことでその難しさや大変さを感じることができるし、そこから生まれる気付きは実感を伴ったものとなるであろう。そして、そういった多くの気付きを、児童が自分の言葉で語り、交流を行いながら学習を進めていくことができる。

3つ目は、普段体験することができない場面を体験することができる点である。授業中の先生の様子はよく知っているが、その裏で準備を行う先生の様子はあまり見たことがないであろう。また、自分の学級の授業の様子はよくわかるが、学年や学級が変わるとその様子もほとんど見たことがないであろうし、さらに、自分達が学習している時間に、校長室・事務室・給食室・保健室で何が行われているのか、このような機会であれば体験することはできない。

以上述べてきたことを踏まえ、改めて須本実践を見つめてみたとき、そこにキャリア教育としての「学校探検」の可能性が見えて来る。児童にとって最も身近な「仕事」の学習をこのような形で行うことができるのは、生活科ならではと言えるのではなかろうか。

(樽谷秀幸)

#### 4 まとめ

生活科が戦後の「はいまわる経験主義」という批判の二の舞にされないためには、この活動を通して、子ども達に何を学ばせたいのか、教師が自覚的であることが求められる。「キャリア」を視点とした単元開発においては、子ども達に活動を通して、いったい何をこそ学ばせたいのか、ということ意識しながら活動を展開することができた。活動に「キャリア」という視点があったためである。内容の保障は学力の保障につながる。本研究で得られた成果は生活科の他の内容でも、当てはまることに自覚的でありたい。

本年度の提案授業でもある須本実践では、「見て分かる」だけではなく「実際にさせて分らせる」という過程を大切にすることがその特徴であり、大いに示唆に富むものであった。内容の保障は、決して「きちんと先生の話聞くことによって保障される」ものではない。豊かな活動を展開させるからこそ、子ども達は主体的に学び取っていくのである。須本実践では、実際に先生の仕事をさせることで、子ども達は嬉々として活動に取り組みながらも、目には見えない先生達の仕事（大変さや喜び等）に気付くことができているという事実がそのことを物語っている。

具体的な活動を通して思考するという発達の過程にある低学年の子ども達との学習において、この単元作りの視点は、生活科の他の学習内容においても今後、ますます大切にされなければならない。(内藤 博愛)

#### 引用(参考)文献

- 1) Bennett, M. & Sani, F. Children's subjective identification with social groups. In S. R. Levy & M. Killen (Eds.), *Intergroup attitudes and relations in Childhood through adulthood*. Oxford University Press: New York. Pp.19-31. (2008)
- 2) 文部科学省 小学校学習指導要領 (1998)
- 3) 文部科学省 小学校学習指導要領 (2009)
- 4) 文部科学省 小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために— (2006)
- 5) 渥美利夫、『低学年児の社会理解を深める』黎明書房 (1989)
- 6) 学部・附属学校共同研究機構研究紀要〈第35号 2007〉
- 7) ブルーナー, J. S. ほか(著) 岡本夏木ほか(訳) 「認識能力の成長: 認識研究センターの共同研究」 明治図書, (1969)
- 8) 長岡文雄, 「若い社会の先生に」, 黎明書房, 1980
- 9) マイケル・ポランニー, 佐藤敬三, 『暗黙知の次元』, 紀伊国屋書店, 1980
- 10) 広島大学附属小学校 学校教育研究会 「方法的能力を培う生活科の授業」
- 11) Rosenberg, M. J. & Hovland, C. I. Cognitive, affective and behavior alcomponents of attitude. In M. J. Rosenberg et al. (Eds.), *Attitude organization and change*. New Haven, CT: Yale University Press. Pp.1-14, (1960)
- 12) 三村隆男「はじめる小学校キャリア教育」実業之日本社 2004